
終わらない

遠星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない

【Nコード】

N6153Y

【作者名】

遠星

【あらすじ】

ある日パーティーの招待を受けて出かけた淋しい主人公は気が付けば怪しい洋館に着いてしまう。一体これはなんなのだろう？と言う悪夢ならではの不条理な話。

招待（前書き）

心を病んでいたわけでもないけれど昔みた悪夢。夢見がちな子供だったんだよ、たぶん。最後は微グロ。夢なので、トンデモ展開有り。

招待

ある日小さな赤い封筒で招待状が届いた。

招待状なんて言っても、よく行くインテリアの店の

小さなレストランを貸し切ってする7周年記念プチパーティー。

なんで7周年だよ10年までまてよなんて思いながら日付を確認する。

ああ、やっぱりその日にも予定は入っていなかった。

私は車をもっていない。

それにせっかくのパーティーなのだ。

アルコールも少し楽しみたいところである。

だから会場のレストランへはタクシーで行こう。…少し贅沢かな。

いつもより少しよそ行きの服を着て（あまり気合が入ってるのも恥ずかしい気がするんだ）

夕方からのパーティーに、小心者の私でも余裕があると安心できる程度の時間をもってタクシーを呼んだ

同伴者OKのパーティーに一人で行く私は、やっぱり浮いてしまうかな？

なんて不安で少し寝不足です。いやいや、あの人のお店なのだから大丈夫。

せっかく招待状をくれたのだ。…優しく丁寧な文章で。行かなかったら嫌な気持ちにさせるかもしれない。

タクシーに乗り込み、道中ですらうだと私は考えていたが、益体もない思考はいつしか睡魔に溶けていた

ボタンっとタクシーのドアが閉まる音で我に帰る。「開く」音でもタクシーの運転手の声でもなく

全てが済んでから気がつくと言うのが情けないが私らしい。

多分寝ぼけたまま運転手に言われるがままに金を出し、会計を済ませたんだろう。

まだいくらかぼんやりと走り去っていくタクシーのエンジン音を遠くに聴きながら、周囲を確認する。

さて、目的地の小さなレストランに着いたはず。

……あれ？目的地についたから降ろされたんだよね？ここはどこだ？目の前にあるのは小さいが雰囲気の良いレストランではなく、まるでナニカの舞台装置のような山の中の洋館だった。

洋館（前書き）

主人公が初めてしゃべった。そしてビビリ。

主人公はインテリアのお店の店主さんがちょっと気になっています。

洋館

- 一 いかにも怪しい洋館などに、入りたくない。
- 二 もう日は落ちて空は橙から群青に侵食されてきている。
- 三 携帯電話は電波が通じない。

踏んだり蹴ったりというか、なんというかもう。

「くそ！死んでしまえ！！」

何ものかに対して呪詛を吐く。むしろ叫びたい。ああ、でもそれはさらに情けない。

最低限の見栄で、なんとか叫ぶのは我慢する。

そもそもこんなところに運んでくれといった覚えはない。タクシー会社め滅んでしまえ！

現状を打開する見込みのない悪態を、ひたすら胸中で捏ね回していると、さらに残念なことに完全に日が落ちていた。

ここは山の中腹にあるのだろう。遠くに街の明かりが見える。タクシーで登ってきた道をたどれば帰ることはできる。

うん、たぶん…10キロ位？だろうか。

知らない土地のしかも夜の山を…ライトもなしでな！

それを拒否するのならある意味ありがちなことに、廃墟で一夜を明かさなければならぬ。

嫌だ嫌だと思いつつホラー映画のセットのような洋館を振り返る。

なんと、意外なことに電気がついていていた。よかった、廃墟じゃないじゃないか！電気があるなら固定電話もきつとあるだろう。

玄関であろういかにも「洋館」というノッカー突きの扉の前に立つ。

私は生粋の日本人だ。ノッカーなんて使ったことはない。

というか、今の時代インターホン、もしくはカメラ付きが標準だろう。

どうしたらいいか玄関先でまごまごしてしまふ。わからないだけでカメラがあるのなら立派な不審者に見えるだろう。

周囲からは風が揺らす木々の音しか聞こえない。待っていても状況は好転しなさそうだ。

覚悟を決めて、私は力強くノッカーを叩きつけた。

ガウンっつ

大きくノックの音は響きわたった。電気は付いているから家人は居るはずなのだ。……だが反応はない。

……もうちょっと待とう。

さらに5分ほど待っても反応はなく、私はおそろおそろ玄関の扉を押し開けてみた。

先客

重々しい外見とは裏腹にキィー…と軽い音をたてて扉は動く。私は15cmほど開いた隙間からこっそりと屋内を覗き込んだ。結果：玄関ホールにいた10数人の男女全てに凝視されていた。……こっそり覗いた分余計に恥ずかしい。逃げだしたい。

屋内は洋灯がキラキラと輝きヨーロッパの高級なホテルのような様相だった。

広いホールにテーブルセット、立派なソファが置かれている。そしてそこに、青年、中年、女性、男性、幼い子供連れまでがあり、しかも服装の統一感もなくなんの集まりかさっぱりわからない。

「君も招待客かね」

実は屋内を観察する間、私は入ることも、かと言って実際逃げることも出来ずに扉に張り付いていた。

先客らしい中年の男から声をかけられやっと扉から離れ、屋内に入る。

ゆっくりと扉は閉まった。開けた時の軽い音とは違い、バタン…と重々しい音を響かせて。

「いえ、その…」

私が羞恥と人見知り故にしどろもどろとなっていると、威圧的に男は続けた。

「違うのかね？では君は一体何をしにここに来たんだ！」

50台位のなにか偉そうな男だ。身なりも良く、だいぶ裕福そうに見えるし、社会的な地位もあるのだろう。その割には短気な…

脳内の住人である私は、この親父はどの程度の人間か？などと評価し、いつそ扱き下ろしたりもしているのだが

表層での私は、男に気圧されまともに返答も出来ない。

それでも、なんとかモゴモゴと答えようとする。

「あの、その…私はここに招待されたのではなくて、」

「…この住人なのかね!？」

さらにいきり立つ男に、人の話を折るな、最後まで聞け。生き急ぐなら、勝手にさっさとくたばってしまえ!

罵詈雑言を心の中で投げ付けながら、うつむき私は事情を吐き出した。

「…どうやら、私は迷子のようなのです」

この年になって迷子も何もないだろうと、罵られるか、呆れられるかと思うたのだが、

場全てがしんっ…と静まり返った。

先客（後書き）

前段なんでもっと省略したほうがいいのだろうか。

主人公は内向的だけれど攻撃性は人一倍高いです。臆病なせいです。英雄的思考ではなく過剰な自己防衛。オチの行動の理由だと思っていただければ。

事情（前書き）

鉄道オタクさんごめんなさい。

ここでは鉄道好きのジオラマ好きの人を連想しています。

珍しい鉄道のミニチュアとかのオークション的なイメージです。

事情

「私たちも…そうなの」

親娘連れの母親らしい、優しげな雰囲気的女性が酷く硬い声でそう言った。

「は？」

私の口から漏れたのは一音だけ。
短気なオヤジはなぜか呆然としていた。

さて、この洋館に集まったのは、みんな方向音痴の阿呆なのか？まあ、その場合勿論私も含まれる。

結論は「否」。一番近いのは…神隠し。

この結論に辿り着く彼ら「先客」達の事情を説明してくれたのは、眼鏡をかけたヒョロとした青年だった。

正直ぱつとしない青年だが、この異常事態に興奮しているようで、滔々と語ってくれた。

彼曰く、私達は「招待客」らしい。

最初にここに着いたのは、鉄道オタクのサラリーマン。自己紹介して名前も聞いたんだが覚えられない。

うん、もう「鉄オタ」でいいだろう。

鉄オタは「即売会案内優先券付」を貰って、会場まで電車と徒歩で行く予定だったらしい。

そして電車で揺られてうつらうつらしていたら、気がついたらこのソファに座っていた。

訳が分からないし、携帯電話も通じない。

外には出られるが明らかに街は遠いようだと、現状確認していたら、気が付けば室内に人が増えていたとのこと。
そして、同じように気が付けば…を繰り返す16人。

なんだそれは。気持ち悪すぎる。

鉄オタは「即売会案内優先券付」

短気オヤジは「大物政治家の祝賀会」

親子連れは「デパートの立食食べ放題」

上品な御婦人は「着物展覧会」

若い夫婦は「新作映画試写会のペアチケット」

眼鏡青年はクラスメイト（女子）の「誕生会」

他にも…

様々な文面で様々な人間が 誘き寄せられる

以前読んだ民話でそんな話があった。

背筋にゾワリと悪寒が這う。

口には出さなかった。言葉にするのが恐ろしかった。

少し得意げに、眼鏡青年は語る。

「つまり年齢や性別、社会的地位は全く関係なく、共通点は「招待」を受けて、

「ココ 来るはずでなかった洋館」にたどり着いていること。

そして、意識を失ってここに着くまでの経過を「覚えていない」こと
って訳なんです」

…違和感があった。私は、違う。

開始

私はタクシーに乗ってここへ来ていた。

そしてこの洋館内に突然現れた訳ではなく、ノッカーを鳴らし入ってきている。

これを言ったほうがいいのかな？

眼鏡青年がへそを曲げて嫌だし、道中寝ていたためここが正しい意味でどこかわからない。

彼らも出入りは自由、外の様子を見ているのだ。私も根本では違わない。……言わないでおこう。

それにこれが馬鹿げたドッキリで、彼らが皆「仕込み」なら、私がイリユージョンのように登場しなかったのは当然。

怪奇現象、神隠し以外に「ドッキリ」可能性を考えて思考に余裕ができた。

「今さらではあるけど、現在私達は不法侵入者なんじゃ？電気もついているし、お住まいの方いますよね？」

常識的な疑問に彼らはどう反応するかな？少しワクワクしながらリアクションを待つ。

彼らは顔を見合わせて、困ったような顔をしたり、ひどく不愉快そうな顔をしたりした。

指摘は正しかったようだ。これで「仕方ない、種明かしを…」と、言ってくれるといい。

「仕方ないんだ」

ただ言葉は途中までしか、望んだものではなかった。

「ここの家の人とは会えてない。玄関以外の扉は窓も含めて一切開かないんだよ。…鍵をされてる様子もないのに」

困惑のような、半笑いのような奇妙な表情をして、眼鏡青年が言う。そこで私は気づく。ほぼ怪奇現象に巻き込まれているのが確定しているこの状況で、

彼らが完全なパニックに陥ってないのは、「玄関」という逃げ道が用意されていたから。

そして、出来すぎた「舞台装置」に自分こそが騙されているんじゃないかと思えていたからだ。

目眩のするような不安と一緒に、奇妙な確信が浮かんた。もう人は増えないだろう。

そしてもう、「玄関」の扉も開かないのだろう、と。

ほかの「招待客」と、ほんの少し違う私。大きく鳴り響いたノック！。重重しく閉まった扉。

たぶん私は「開始」のスイッチを押し、それを知らせる「鐘を鳴らす」役を振られていた。

開始（後書き）

前振り長い！！あんまりにも不条理なので導入部を付けたかっただけなのに！！

「みんなも同じ夢を見ればいいヨ？」と言いたかっただけなのに！！

悪夢を共有させようと言うのが間違いなんでしょう。
題名は終わらないけど話は終わらせる気でいます。

道化

勝手に確信はしていたが、「もうここから出られないこと」を確認する気は起こらなかった。

パニックになる。そして私は、原因として髑髏り殺しになるかもしれない。

でもこのまま黙っていたとしても、そのうち誰かが気づいてしまう。私ができるまで「小用」は外で済ませていたらしいから。

皆と不安を紛らわせるために雑談を交わしながらも、グルグルと「私のための解決策」を考える。

絶対私は「不審」だろう。でも、コレ以外に「生き残る方法」は思いつかなかったのだ。

少しため息をついて人の輪から外れ、

そして極々当たり前のように、

奥へ続くドアを開ける。

ガチャリとドアノブは回り、軽く押すと真っ暗な廊下が見えた。

会話は止み、背後からは息を呑む音が聞こえた。

振り向いて言う。

「…開いちゃいました？」

敢えて軽く言ってみた。

当然誰もツツコミなど入れてくれない。可笑しなものを見る目で見つめられる。

得たいの知れない者を見る、嫌悪と恐怖を含んだ眼差しにすぐに赦しを乞いたくなる。

でも出来ない。選択は「道化」になることだった。簡単に害されないように、舐められないように、

まるで「怪奇」の一部であるかのように振舞う。

結果、彼らは私を居ないものとして扱うことにしたようだ。

親子連れの小さな女の子だけが、突然仲間ハズレにされた私を不思議そうに見ている。

私は奥へと続くドア近くの壁に寄りかかって、彼らが相談するのを観察していた。

じわじわと不穏になる空気の中、若夫婦の嫁の方が玄関の扉が空かないことに気づき恐慌に陥った。

「出して！助けて！！」叫ぶ声と扉を叩く音、騒然とした空気に女の子も泣き出す。

殺気立った視線が集まるが、表情なく彼らを見つめる「怪奇の一部」に掴みかかれる者は居なかった。

私には表情を造る余裕などなかった。視線に籠った殺気と恐怖に当てられ、

予測の通りに進んでしまう未来に、誰よりも震え怯えていたから。

観察（前書き）

他者視点入ります。

主人公、現状がもう自分の手から離れたと思っています。

観察

眼鏡青年（中田 康）視点

突如として玄関が開かなくなり、状況は一気に緊迫感を増した。

閉じ込められた「招待客」で会議を行い、

入れ替わりに開くようになった洋館内部の探索を行うことにした。

僕をリーダーとして、まずは男6人で「探検隊チームA」を組む。

まあBチームはないんだけど。

危険があるかもしれないから女性5人にはこのまま玄関ホールで待機してもらい、

僕らがいない間に何かあってもいけないから残りの男性5人にも彼女らの警護してもらう。

問題は「あいつ」だ。今は動かないけれど何を企んでいるかわからない。

人数が多いとはいえ、この場に残っていてはなにかをしでかしそうで嫌だし、

連れていくのも危険な気がする。

出来ればロープか何かで縛っておけばいいんだけどなあ。

あと、何か武器とか欲しい！

山の中の洋館なんて出来過ぎなシチュエーションだけど、解決するためには行動しなくちゃ！

こういう時は男が頑張らなきゃね！

ようやく私なりの「恐慌」の波がひいた。

彼らの様子の観察に戻る。…ドアの向こうを見に行くことにしたようだ。

自分が示して見せた道ではあるけれど正直あの行動は失敗だったか

もしれない。

おかげで直ぐに暴力を振るわれたりはしていないが、恐怖が飽和してしまえば矛先は確実にこちらを向くだろう。

そもそも、原因とされ鬨り殺しになる、というのはあくまで私の勝手な妄想だ。

なかなか高めの可能性を感じても、確実ではなかったのだからじつと様子を見ていれば良かったのかもしれない。

彼ら「探検隊（漏れ聞こえた。どういうノリなのか不思議だ）」がここからの脱出方法でも見つけ出さない限り、選択肢は「すぐ殺されるか、少し後で殺されるか」の二つしかない気がする。

下手をしたら脱出方法が分かっても私は置いて行かれる。我ながら悲観的状况だ。

当然ながら私は「探検隊」に入れない。怪しすぎるし、彼らからすれば私は「敵」だろう。

「探検隊」は壁に寄り掛かる私の前を通り過ぎ、ドアへ向かう。

眼鏡青年は私を睨みつけながら、鉄オタは目をそらし、若夫婦（旦那）は忌々しげに舌打ちし、

初老の男性は怯えながらもチラチラと様子を伺い、ぽっちやりとした大人しそうな中年男性はずっと俯いたままだった。

短気オヤジは意外なことにじつとこちらを観察していた。

私とその目に怖じけるとなぜが少し満足したように頷き、ドアの向うに行った。

数秒後、

「ぎいやアアアアアアアアアアあああ！」

ドアの向こうから絶叫が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6153y/>

終わらない

2011年11月24日21時53分発行